

古典的な言語類型の分類

山口 巖

これは鳥取大学において本年度一般教養として講義する予定の一章である。中にグリーンバーグらの言語的普遍の問題について説明するところがあり、ここにおいてグリーンバーグの所説についての若干の疑問を呈した。この疑問が正鵠を得たものか否かについて、江湖の御判断を請いたいというのが、ここに発表する所以に他ならない。

0.1 概念の発生

§1 言語の類型という概念が初めて言語学に現れたのは、おそらくヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1768-1835) によってだと思われます。フンボルトはプロイセンの政治家であり、学者であって、フンボルト大学の創立者でありました。言語についての知識も極めて広く、西はバスクの言語から日本語、中国語、ビルマ語、タイ語を含む太平洋全域の言語、アメリカインディアンの諸語に及ぶ広大な空間の言語についての知識を持っていました。主著としては『ジャワ島のカヴィ語について』[3] がありますが、特に重要でもあり、大きい影響を与えたのは、序文としてこの著作につけられた、『人間言語の種々相とその人類の精神的発達に及す影響について』[4] という論文です。この序文はやがて独立して扱われ、言語学はもとより、哲学、文学にも、大きな影響を与えましたが、その影響は現在に至っても、強力な形で残っています。これには亀山健吉による邦訳『人間と精神』[7] があります。

この中でフンボルトは中国語を例にしてこれが「(思考の) 範疇を指示することが欠けてしまっている」ものだとして、このような言語を孤立語 *isolated languages* としています。これに対立するものとしては、たとえばラテン語のように、本来の屈折をもつ語 *flexive languages* があるといえます。彼はこれ以外のものはないが、ただひとつありうるものは、「複合」という方法で文を作るものだといえます。「複合」というのは、彼によれば、「本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかった屈折」であって、実際は「機械的な接着にすぎず、純粹な有機的付加形成ではない」として、「どっちつかずの混血児」だということです。そしてこのような方法は「近頃膠着」という名称で呼ば

れている」といいます [7, p.186].

いいかえれば、膠着語 *agglutinative languages* というのは屈折語になりたかったのになれなかった言語だということになります。このようなフンボルトの考えには印欧語の優越性と、その他の言語に対する蔑視という、当時のヨーロッパ人たちの偏見が強く感じられます。

§2 それはさておき、ここで述べられた屈折語、膠着語、孤立語という区別は、その後長い間言語学者の中に受継がれてきました。孤立語としてあげられているのは中国語ですが、中国語では「走」といっても、それだけでは「歩く」という動詞なのか、それとも「歩行」という名詞なのかわかりません。こういう品詞の区別は、文の中でこの語がどういう位置を占めているかによるのです。

これに対して屈折語というのは、語尾変化をもつ単語のばあいには、語尾が時称、人称、格など、その単語が文の中でもつ働きを示すものです。ロシア語などもそうですが、たとえばラテン語のばあい、*dominus* 「主人」という名詞は、単数で *dominus*, *domine*, *dominum*, *dominī*, *dominō*, *dominō*, 複数で *dominī*, *dominōs*, *dominōrum*, *dominīs*, *dominīs* というように変化します。この変化を通じて変らない *domin-* という部分は語幹といい、「主人」という意味を支えています。これに対して *domin-us* の *-us* のように変化する部分は語尾といい、文法的な意味を示します。たとえば *-us* は男性、単数、主格をあらわしています。

しかし逆に *-us* という語尾はいつも男性、単数、主格をあらわしているとは限りません。たとえば *domus* 「家」という語は単数・主格ではありますが、女性名詞です。あるいは *vir* 「男」という単語は語尾をもっていませんが、男性、単数、主格をあらわしています。これはほかの格にもいえることなのです。つまり、屈折語のばあいには語尾は格、数、性のようないくつものカテゴリーをあらわしますが、それはどの語幹につくかによって変わってきます。また語尾のどの部分が性をあらわし、どの部分が数、あるいは格をあらわすということもできないのです。従って語尾は語幹と一体になって初めて意味を持つということになります。

§3 これに対して膠着語のばあい、たとえば日本語の「私」という語は文法的な関係をあらわす部分をもっていません。いわばラテン語の語幹の部分だけをあらわしています。文法的な意味はたとえば主語ならば「が」という付属語(助詞)をつけて「私が」といえばよいということになります。またこれはどの名詞についても同じ主語をあらわすという役目を持っています。さらに、「私たちが」、「猫たちが」というばあい、「た

ち」は一応複数をあらわし、「が」が主語をあらわします。こういうように、膠着語のばあいには、付属語または言語によっては語尾の、どれが数をあらわしどれが「格」に当るものをあらわすかがはっきりしています。屈折語の語尾を多機能的というとなれば、膠着語のばあいには付属語または語尾は単機能的だということができるでしょう。

このように考えれば、膠着語の方が明晰で優れているとさえ思われてきます。フンボルトの母国語がもし膠着語だったら、膠着語の方が優れているといったかもしれません。

§4 さて、現代の言語類型学の先駆けになったのは、アメリカのエドワード・サピア Edward Sapir (1884-1939) でありました。この人は人類学者のフランツ・ボアズ Franz Boas (1858-1942) の弟子でアメリカ・インディアン言語に精通していました。アメリカ・インディアンの言語はいくつかの語族に分れていますが、そのどれもが当時知られていたヨーロッパやアジアの言語とは大変に違った構造をもっていました。これらの言語の知識および人類学の素養によって、サピアは言語に価値の優劣がないという考えにすでに到達していました。彼は次のように述べています。

なぜ言語の分類が結局概して無駄な企てとなってしまったかを示すものとして、ここに第四の理由がある。……前世紀の中葉に至るころ、社会諸科学にしみこんだ進化論的偏見がすなわちそれである。……実はこの偏見には、その大きい先駆をつとめた、もっと人間的な偏見が入りまじっていたのである。これまでの大多数の言語理論家たちは、だいたい一定の型に属する言語を話していた。彼らにとって、この型の言語のうちで最も完全に発達したものといえば、その幼少のころ習ったラテン語かまたはギリシア語であった。従って熟知しているこれらの言語は、人間のことばの到達し得た＜最高の＞発達段階をあらわし、他の型はすべて彼らの愛する＜屈折的＞な型に至る中間段階にすぎないと信ずることは、彼らにとってむずかしいことではなかった [5, 邦訳 p.123].

ここからサピアは次のようにいいます。

言語というものをその真の内面性において理解しようとするならば、優先的価値観の迷蒙を解いて、英語とホットtentott語¹とを、同じ超然たる態度で、冷静に、しかも興味を

¹ ホットtentottというものは現在では差別語であるとして用いられてはいません。現在ではこれにかわってコイサン語というようです。

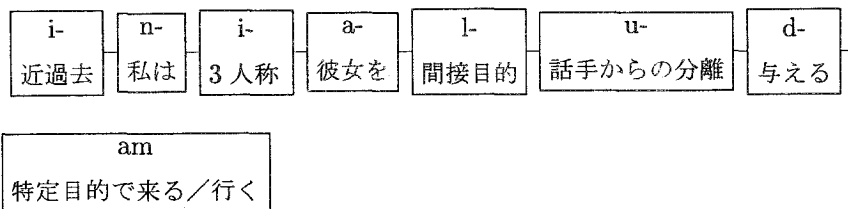
持って、観察する習慣をつけないといけない (*ibid.*).

§5 サピアは言語の類型というものを厳密に区別できるとは考えていませんでした。彼はこれについて次のようにいいます。

厳密に言えば、地球の上で話される数千の言語と方言の特異性を十分公平に扱うような、有限の数の類型を立てることの不可能さははじめからわかっている [5, 邦訳 p.121].

それにもかかわらず、サピアは、言語をできるだけ厳密にいくつかの類型に分類しようと考えました。先に述べた「孤立」、「膠着」、「屈折」という概念と並んで当時用いられていた、「分析的」analytic、「統合的」synthetic、「複統合的」polysynthetic という分類概念も吟味しました。「複統合的」な言語という類型を挙げたとき、サピアはアメリカ・インディアン言語の頭を思い浮べていたのではないかと思います。インディアン言語には、いろいろな意味を持った単位が高度に統合されて文を作っているために、形の上では文と単語の区別が付かないものがみられるからです。サピア自身の挙げている例を引用すれば、次のようになります。

チヌークの言語では、*inialudam* という「文」は、はじめの *a* にはっきりしたアクセントをもっていて、形の上では一つの単語と見なすことができます。しかしこれを分析すれば、次のようになるといいます。

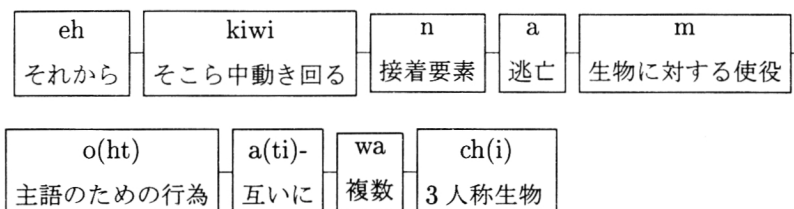


したがって、全体の意味は「私は (-i-) 彼女に (-a-l-) それを (-i-) 与える (-u-) ために来 (-am) た (-i-)」というようになるといいます。

あるいはまたアルゴンキン語族に属するフォックス語では、同じように、

ehkiwinamohtatiwach(i)

という「文」は次のように分析されるといいます。



従ってこれは「それから (eh) 彼ら生き物は (chi) ある生き物に (m) 彼ら自身の (oht) 相互 (ati) から逃れて (a) さまよ わせた」＝「それから彼らは一緒になって (彼を) 自分たちのもとからずっと追払っていた」という意味になるといいます。

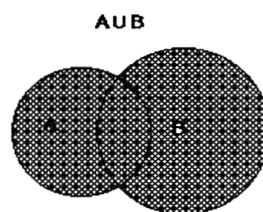
しかしこのように形式の面からの類別は、言語の構造が千差万別であるために、どこかに線を引くことが難しく、学問的な意味を持つことができませんでした。このため、言語の類型という考え方は、言語学の中でほとんど意味を持たないと考えられるようになりました。

0.2 言語的普遍

§6 形式面からの言語の類型の問題は、別の角度からの研究によって息を吹返しました。それは「言語的普遍」language universals という考え方でした。これはすべての言語を通じて普遍的にみられる法則性を探ろうとするものでした。これに理論的な基礎を与えるきっかけになったのは、グリーンバーク Joseph Harold Greenberg (1915-), ジェンキンス J. J. Jenkins, オズグッド Ch. H. Osgood (1916-) という、三人の署名のある論文「言語的普遍に関する覚書き」*Memorandum concerning language universals* [2] でありました。

これによれば、言語的普遍というのは、 $\forall x(x \in L \subset \dots)$ という形をしているものであると定義されています²。

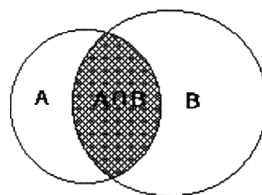
集合について説明しますと、次のようになります。いまある集合 A と、別の集合 B とがあるとき、集合 A か、あるいは集合 B のどちらかに属している (両方に属していてもよい) ものの集合は集合 A と B の「合併」(join), または和集合といい、 $A \cup B$ とあらわします。記号 $\cup$ の形からこれを $A \text{ cup } B$ ということもあります。



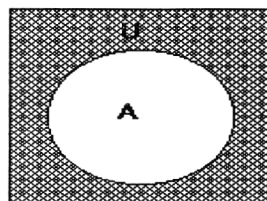
²グリーンバークの表現では次のようになっています。For all values of X , if X is a language, then, if it contains some feature α , it always contains some further feature β , but not vice versa[1, p.61].

たとえばいま集合 A を淡水にすむ生き物の集合とし、集合 B を塩水にすむ生き物の集合としたとき、その合併集合は水中にすむ生き物の集合ということになります。

つぎに集合 A と集合 B の両方に属している元の集合は集合 A と B の「交わり」(meet) あるいは積集合といい、 $A \cap B$ であらわします。記号 $\cap$ の形から、これを A cap B ということもあります。たとえば A を哺乳類の集合とし、 B を水中にすむ動物の集合としたとき、 $A \cap B$ は水中にすむ哺乳類の集合になります。従って、ここには鯨やイルカ、ジュゴン、河馬などが属することになります。

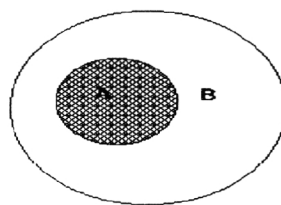


さらに、すべての元の集合を普遍集合といい、 U であらわすことにします。これと任意の集合 A とを考えたとき、普遍集合に属してはいるが、集合 A には属していない元の集合 A の「補集合」といい、 $\bar{A}$ であらわします。たとえば生き物の集合を普遍集合と考え、 A を動物の集合とすると、その補集合は植物の集合ということになるでしょう。



§7 $\forall$ というのは「全称記号」universal quantifier といわれるもので、 $\forall x$ というのは、「すべての x について」という意味をもっています。 $x \in A$ というのは、 x という元(要素)が集合 A に属することを意味しています。上の定義で L というのは、言語の集合をあらわしています。

また $A \subset B$ というのはもともと集合 A が集合 B に含まれているということをあらわすものです。別の言い方をすれば、集合 A は集合 B の部分集合だということもできます。このとき集合 A に属している元はすべて集合 B の元です(逆は正しくありません)。したがって $x \in A \subset B$ というのは「もし x が集合 A の元であったら、 x は集合 B の元である」ということになります。たとえば集合 A を犬科の動物の集合とし、 B を哺乳類の集合としたとき、集合 A に属するもの、従ってたとえば狼のような犬科の動物は必ず集合 B に属することになります。すなわち哺乳類に属しているのです。いいかえれば、これは「もし a ならば b 」ということを意味しています。したがって「 $\sim$ ならば $\sim$ である」というのは、包含関係 implication を前提としてい



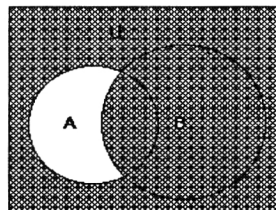
ます。結果として上の式は「すべての x について、もし x が言語ならば、 $\sim$ である」という条件を満たすもの、ということになります。

たとえば「すべての言語は母音と子音から成る」というのは、明らかにこの条件を満たしていますから、言語的普遍だということができます。

第二のものとしては、単なる因果関係を持つものがあります。これは $a \rightarrow b$ すなわち「もし a ならば b となる b が存在する」という形をもっています。これは先に述べた表し方によれば、次のようになります。

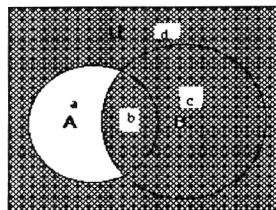
「もし a ならば b である」というのは、集合で考えると、 $\bar{A} \cup B$ となります。どうしてそうなるのでしょうか。実は今挙げた式は $\overline{A \cap \bar{B}}$ という式を変形したもののなのです。

a ならば b ということは、「 a であって、かつ b でないことはない」すなわち a であれば、必ず b である、ということの意味するからです。これを集合の形で表せば、右の図のようになります。そうすると $\bar{A} \cup B$ というのは、「 A でないか、あるいは B である」ということをあらわしているといえます。このことから、「もし a ならば b である」という文章は、一見奇妙にも思われますが、実は論理の上では「たとえ a でなくても b である」というばあいを除外しないことがわかります。



彼らによれば、これはたとえば「もしある言語に双数があれば必ず複数がある」とか、「複数があれば必ず単数がある」というようなばあいだといえます。これは単数と双数しかない言語はないと主張するものです。双数というのは言語によっては一つのものをあらわすのは単数ですが二つ以上のものをあらわすときにすぐ複数を用いるのではなく、二つの時には双数という形を使い、三つ以上になって初めて複数を使うようになるというばあいがあることを指しています。印欧語古くには一般に双数をもっていましたし、スラヴ諸語でもたとえばソルブ語は現在でも双数をもってします。この主張自体は経験的に確かなものに思えます。

しかしグリーンバークなどのいっている $a \rightarrow b$ というのがこのばあい正しいか、あるいは少なくとも言語学的に何か意味があることなのかどうかについては、疑問に思えるところがあります。くどいようですが、なぜそう考えるかといえ、さきに $a \rightarrow b$ は集合でいえば、右のような真理集合になるといいました。このばあい b は



$A \cap B$ に属していますから、「 a ならば b 」というのは成立します。

それでは d はどうでしょうか。これは A にも B にも属してはいません。しかしこのばあいにも「 a ならば b 」はなりたっています。なぜかといえば、「 d は A に属していないから B にも属していないのだ」といえるからです。また a のばあいにはこれが成立たないことは明らかです。そこで問題になるのは c のばあいです。このばあい c は A に属してはいませんが、 B に属しており、しかも B は影のつけられた部分に属していますから、「 a ならば b 」が成立っているはずで、いいかえれば「 a ならば b 」というのは、ある元が A に属していなくても B に属していれば正しいということになるのです。

もしそうとすれば、「もしある言語に複数があれば、単数がある」という主張を $a \rightarrow b$ だとすると、複数がなくても単数があれば正しいということになってしまうのです。したがってこれもトリヴィアルな意味で正しいといえますが、これが言語学的に何らかの意味を持ち得るようには思えません。たとえば日本語について、「日本語は言語であるからもし複数があれば単数を持っている」という主張は、論理的には正しいのですが、言語学の立場からすれば、これは正しいことではなく、むしろ「複数がなければ単数もない」というのが正しい、いいかえれば「日本語には文法的な数の概念はない」というべきなのです。これは私たちの直感にかなっています。グリーンバーグたちの主張が少し変なのではないかというのは、こういう理由なのです。もしこれを第一のばあいのように、部分集合と全体集合のような包含関係だと考えれば、常に正しいことになりましょう。もちろんグリーンバーグなどが全称記号などを言語にだけ使って数理論理的にあらわすべき表現を使わなければ、こんな面倒なことをいう必要は全くないので³。

そこで $a \rightarrow b$ というものがすべての a について成立つばあいを考えてみますと、集合 $\bar{A} \cup B = U$ すなわち集合 A の普遍集合 U に関する補集合 $\bar{A}$ と B の合併集合が普遍集合に等しいばあいだということが分ります。これは直感的には上に述べた $\bar{A} \cup B$ の白抜きの部分を零にすることですから、結局 $A \subset B = U$ ということになります。これは $a \rightarrow b$ が成立つための十分条件に他なりません。式で書けば $\forall x(x \in L \rightarrow \forall a(a \rightarrow b))$ とでもなりましょうか。

§8 さてグリーンバーグらの挙げている第三の種類の言語的普遍は、 $a \rightarrow b$ と $b \rightarrow a$

³ b の部分だけを考えるならば、 $\exists x(a \rightarrow b)$ とすればよいと思われます。 $\exists x$ は existential quantifier といい、ある命題を成立たせるような x が存在する、という意味です。そうすれば $\forall x(x \in L \rightarrow \exists b(a \rightarrow b))$ となります。

の両方が成立つものです。これは一般に「反対称律」antisymmetric relation と呼ばれているものですが、たとえば関係 $\leq$, $\geq$ などがこれに当たります。もし $a \leq b$ と $b \leq a$ とが同時に成立つと、 $a = b$ が成立つ、というものです。グリーンバークの挙げている例では、「側音のクリックをもつ言語は、歯音のクリックももっていて、その逆もいえる」というものがこれに当たります。側音 laterals というのは、舌の横側から空気がでるもので、[l] がその代表的なものです。また歯音 dentals というのは舌と歯とが接触して破裂を起す [t], [d] など、同じく摩擦をおこす [s], [z], [θ], [ð] などがその典型的なものです。

またクリック click というのは「舌打ち」をするばあいのように、肺の吸気とは関係なく、口の中だけで外からの空気を呼込むことで立てる音で、「吸着音」とも訳されます。アフリカのブッシュマン Bushman のことば、コイサン Koisan のことば、ズールー語 Zulu などではこのような音が言語の正式な音韻になっているといわれます。表記は人によっていろいろですが、国際標音記号 IPA (International phonetic alphabet — いわゆる「音声記号」) では、吸着音の中の歯音は [ɖ], 反り舌音 retroflex⁴ は [ɮ], 軟口蓋音は [ɣ], 側音は [ɬ] によってあらわされます。

グリーンバークたちは、このほか第二、第三の主張に蓋然性の概念を導入して、第四、第五の言語的普遍を定義しようとしています。彼らはまず第四について、これが「すべての言語において、事象 a をもつ可能性が、他の事象をもつ可能性よりも大きい」という形をしているといいます。そして第五のものは、「もしある言語に事象 a があるとするば、事象 b があるばあいが、ないばあいよりも大きい」という形をしているといいます。しかし言語的普遍というものが、論理的なものであるとすれば、ここに蓋然性を入れてくるということには、疑問を感じないわけにはいきません。皆さんはどうお考えでしょうか。

§9 グリーンバークらの言語的普遍という考え方はこれを用いて言語を分類する基準になると考えられるようになりました。たとえば双数をもつ言語ともたない言語というような分類です。近年特にアメリカでこの考え方が広まっていました。しかしこれは言語の外面的な形を基準にして言語の類型を考えようという点では、フンボルトやサピアの方法と、原理的に変ったものではありませんでした。

もしこれを用いるとすれば、まず第一に問題になるのは、言語のどのような外形的

⁴ 「反り舌音」というのは、舌の先をあげて後ろにそらして発音する音で、ロシア語の ш, ж は反り舌音です。反り舌音はたとえばサンスクリット (梵語) には規則的にみられる音で、[t], [d], [n], [ʃ], [ʒ] のほか、有気音 [tʰ], [dʰ] があります。またこのほかに言語によれば [ɳ] および [ɽ] もみられるといいます [8, p.145]。またこの後にあげている「軟口蓋音」といわれるのは [k] とか [g] とかが代表的な音です [ibid. p.151]。

な特徴を基本的な特徴としてとらえるかということです。ところが言語にはいろいろな特徴がありますから、どれを取るかという基準がなければなりません。特徴を比較してこれがより本質的なものだと決定する基準が必要になるのです。しかしそのようなものは人によってさまざまで、合意を求めることは困難でした。言語的普遍による類型学の決定的な欠陥は今述べたような基準が理論の内部で用意できないというところにあったのです。

関係文献

- [1] J. H. Greenberg
Language universals, *Current trends in linguistics*, Vol.3 Theoretical Foundations, Mouton 1966, pp.61-112.
- [2] J. H. Greenberg, J. J. Jenkins, Ch. E. Osgood
Memorandum concerning language universals, *Universals of language, Report of a conference held at Dobbs Ferry, New York, April 13-15, 1961*, ed. by J. H. Greenberg, Cambridge (Mass.), 1963.
- [3] Wilhelm von Humboldt
Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java, Bd. 1 1832, Bd. 2 1838, Bd. 3 1840.
- [4] Wilhelm von Humboldt
Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, UTB/BRO 1998.
- [5] Edward Sapir
Language: An Introduction to the Study of Speech. Harcourt Brace Trade Division 1955.
- [6] 安藤 貞雄訳
エドワード・サピア著『言語 ことばの研究序説』岩波書店 1998.
- [7] 亀山 健吉訳
ヴィルヘルム・フォン・フンボルト著『言語と精神』法政大学出版局 1984.
- [8] 服部四郎
『音声学』岩波全書 131, 岩波書店 1952.

Summary

Formalistic Classification of Linguistic Typology

Iwao YAMAGUCHI

The traditional ways employed to classify language types are based on formalistic principles. In spite of the efforts of eminent scholars, including Edward Sapir, it seems impossible to achieve satisfactory results in the face of the perplexing diversity in the structure of existing languages.

A new theory presented by Greenberg and others concerning constants or universals of language was expected to offer a clue to the mystery of language classification. However, the idea of linguistic universals is nothing but formalistic in its essence and does not offer typologists any useful perspectives in this concern. We would like to point out that their seemingly strict, logical expression of language universals may have contained, as contradictory as it seems, an illogical element in its result owing to their strict logical expression.